

## 5. 療育プログラム開発の過去・ 現在・未来—実践と研究—

はじめに

立命館大学心理・教育センターは大学院応用人間科学研究科の付置施設として2001年にスタートし、9月からは外来の受付などの業務を開始した。同時に立命館大学人間科学研究所（以下、人間科学研究所）を中心とする学術フロンティア事業の一環として子どもプロジェクトの活動も開始され心理・教育相談センターもその研究フィールドの1つとなった。

療育プログラム開発プロジェクトの発足の中心となったのは、心理・教育相談センターに外来通所していた自閉症スペクトラム児（以下、ASD児）をもつ2名の親であり、「子どもの療育と親の交流の場を持ちたい」という提案が大きく関わっている。その後、親と教員（専門家）と院生が立ち上げに向けて話し合いを重ね、2003年4月から、月1回のASD児のための療育・教育活動として療育プログラムが開始された。当初は2名の参加児であったが、2004年3月には参加児8名ときょうだい5名の合計13名が参加するようになり、参加人数の増加や求められる発達課題の違いから、2004年4月からは、幼児グループと学童グループに分かれて活動を行うようになった。現在（2015年12月時点）では、参加児は23名であり、幼児期グループ、学童期低学年グループ、学童期高学年グループ、中学～高校生期グループ、きょうだいグループの5グループで療育プログラム活動をおこなっている。

約12年間、本プロジェクトでは、ASD児を対象とした療育プログラムの実践とともに、療育プログラムの開発を目的とした研究活動にも取り組んできた。この節では、約12年間の療育プログラムの活動をTable.1のように4時期に区分して、各時期にどのような研究論文、実践報告、学会発表などをしてきたのかをまとめていく。

Table.1 各時期の区分について

	期間	グループ数（きょうだいグループを含む）
準備期	2001年9月～2003年3月	なし
前期	2003年4月～2007年3月	3グループ（参加児2グループ・きょうだい1グループ）
中期	2007年4月～2013年3月	5グループ（参加児3グループ・きょうだい2グループ）
後期	2013年4月～現在（2015年12月）	5グループ（参加児4グループ・きょうだい1グループ）

2001年度～2002年度：準備期

## 2001 年度～ 2002 年度：準備期

準備期では、立命館大学心理・教育センターで2名の ASD 児を対象にプレイセラピーとして個別の対応を行っており、この時期の実践については、2004 年 8 月に障害者問題研究 32 巻 2 号において、プレイセラピーの事例研究が掲載され、2005 年 3 月には立命館大学人間科学研究所より刊行された学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ 12「対人関係に難しさのある子どもの発達の可能性と教育プログラム開発の試み」のなかでプレイセラピーの取り組みが報告されている。

### (1) 2003 年度～ 2006 年度：前期

前期は、療育プログラム開発プロジェクトが開始した時期であり、中期・後期で取り組まれた療育プログラムの構造、活動の流れなどの基礎を築いた時期でもある。そのため、療育プログラム開発において、理論的に遊びを取り組む意義についてまとめたり、療育プログラムの構造、親の会などについて実践報告と学会発表で報告したりしている。

2005 年 3 月には、準備期間の活動のまとめと共に、2003 年 4 月から開始された療育プログラム活動についてまとめたものが、人間科学研究所から学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ 12「対人関係に難しさのある子どもの発達の可能性と教育プログラム開発の試み」というタイトルで刊行されている。また、2006 年 12 月に人間科学研究所主催のシンポジウム「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の早期発見と早期対応」にて、荒木が「遊びに着目した早期対応プログラムの試み」というテーマで報告をしている。この報告について、2007 年 3 月に同研究所から刊行されたオープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ 4「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の早期発見と早期対応」にて掲載されている。

研究論文としては、前期の療育プログラム開発については、親の会、幼児グループ、学童グループの活動を前田ら、荒井ら、梅山らがそれぞれ実践報告としてまとめている。これら報告は人間科学研究所から発行されている立命館人間科学研究 No.14 に掲載されている。学会発表としては、東京都の文京学院大

学で 2006 年 9 月に開催された日本応用心理学会第 73 回大会にて、前田ら、荒井ら、梅山らがそれぞれポスター発表をおこなっている。さらに、荒木が療育プログラム開発の基本的視座について研究ノートとしてまとめたものが 2008 年 10 月に心理・教育センター年報で掲載されている。

#### 前期の刊行物

- 荒木穂積・河野望・井上洋平・立命館大学人間科学研究所「子どもプロジェクト」編（2005）学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ 12「対人関係に難しさのある子どもの発達の可能性と教育プログラム開発の試み」立命館大学人間科学研究所。
- 荒木穂積・オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」子どもプロジェクト編（2007）オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ 4「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の早期発見と早期対応」立命館大学人間科学研究所。

#### 前期の研究論文

- 荒木穂積・井上洋平・立田幸代子・前田明日香・森光彩（2004）「高機能自閉症児・アスペルガー障害児の発達と教育的対応—ふり遊びの分析から—」障害者問題研究, 32（2）, 43-50。

#### 前期の実践報告

- 前田明日香・河野望・荒木穂積・荒木美知子・森光彩・吉田美穂（2007）「自閉症スペクトラム児のための療育プログラム開発（1）—親の会：親のニーズの分析から—」。立命館人間科学研究, 14, 99-112.
- 荒井庸子・松井真樹・張鋭・荒木穂積・渋谷郁子・安松あず紗・中原咲子・荒木美知子・早川美紗・吉田有希（2007）「自閉症スペクトラム児のための療育プログラム開発（2）—幼児期：ふり遊びの分析から—」立命館人間科学研究, 14, 113-126, 2007.
- 梅山佐和・前田明日香・井上洋平・岩本彩子・荒木穂積・内本純子・近藤千尋・飯田真理子・渡辺太郎・荒木美知子（2007）「自閉症スペクトラム

児のための療育プログラム開発 (3) —学童期:「ごっこ」遊びの分析から—」立命館人間科学研究, 14, 127-141.

#### 前期の研究ノート

- 荒木穂積 (2008)「自閉症療育プログラム開発の基本的視座—歴史的変遷過程の検討を通して—」立命館大学心理・教育相談センター年報, 7, 11-25.

#### 前期の学会発表

- 荒井庸子・松井真樹・張鋭・荒木穂積・渋谷郁子・安松あず紗・中原咲子・荒木美知子・早川美紗・吉田有希 (2006)「自閉症スペクトラム児のための療育プログラム開発 (1) —幼児期:ふり遊びの分析から—」日本応用心理学会第 73 回大会
- 梅山佐和・前田明日香・井上洋平・岩本彩子・荒木穂積・内本純子・近藤千尋・飯田真理子・渡辺太郎・荒木美知子 (2006)「自閉症スペクトラム児のための療育プログラム開発 (2) —学童期:「ごっこ」遊びの分析から—」日本応用心理学会第 73 回大会
- 河野望・前田明日香・荒木穂積・荒木美知子・森光彩・吉田美穂 (2006)「自閉症スペクトラム児のための療育プログラム開発 (3) —親の会:親のニーズの分析から—」日本応用心理学会第 73 回大会

#### 前期のシンポジウム

- 荒木穂積 (2006)「遊びに着目した早期対応プログラムの試み」シンポジウム「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の早期発見と早期対応」立命館大学 (主催:人間科学研究所)。

#### (2) 2007 年度～2012 年度:中期

中期は前期と比較して、学会発表とシンポジウムに多く参加している時期である。この時期は、前期のグループ編成が変更になり、参加児グループが1つ増えた。これにより、4グループでの療育プログラムの活動をおこなっている。前期で構造化された療育プログラムを中心に、各グループで参加児の課題や興

味・関心に合わせて遊びの内容、集団活動について検討してきた。

2007 年 12 月に人間科学研究所主催のシンポジウム「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」（後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会）において、荒木が「集団遊びに着目した学童期プログラム開発の試み」というテーマで報告をしている。この報告については 2008 年 6 月に同研究所から刊行されたオープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ 11「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」に掲載されている。また、2009 年 12 月に同研究所が主催したシンポジウム「高機能自閉症・アスペルガー症候群の学童期・思春期の発達特徴と教育的支援—学童期・思春期における二次障害への早期対応と人格発達への発達支援—」においても、荒木が「学童期の特別なニーズと学校外のプログラム—あひるくらぶの活動から—」というテーマで報告をしている。この報告については、2010 年 3 月に刊行されたオープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ 21「高機能自閉症・アスペルガー症候群の学童期・思春期の発達特徴と教育的支援—学童期・思春期における二次障害への早期対応と人格発達への発達支援—」に記載されている。

研究論文としては、前田らが ASD 児と親の支援に関する調査研究をして、まとめたものが 2009 年 8 月に発行された「立命館人間科学研究 No.19」に掲載されている。中期では実践報告や研究ノートでの報告はされていない。

学会発表では、2008 年 3 月に大阪府の追手門学院大学で開催された日本発達心理学会第 19 回大会において、下向ら、小野ら、松村らが各グループの活動プログラムについてポスター発表をおこなっている。また、2013 年 3 月には東京都の明治学院大学で開催された日本発達心理学会第 24 回大会で、参加児の年齢が上がることで変わってきた課題や遊びについて検討をおこない、まとめたものを佐々木ら、高尾ら、井篠らがそれぞれポスター発表で報告している。

2013 年 1 月に開催された人間科学研究所の年次総会において、竹内がポスターセッションのなかで、療育プログラム開発について発表をおこなっている。

### 中期の刊行物

- 荒木穂積・オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」子どもプロジェクト編（2008）オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ 11「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」立命館大学人間科学研究所.
- 荒木穂積・オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」子どもプロジェクト編（2010）オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築」ヒューマンサービスリサーチ 21「高機能自閉症・アスペルガー症候群の学童期・思春期の発達特徴と教育的支援—学童期・思春期における二次障害への早期対応と人格発達への発達支援—」立命館大学人間科学研究所.

### 中期の研究論文

- 前田明日香・荒井庸子・井上洋平・張鋭・荒木美知子・荒木穂積・竹内謙彰（2009）「自閉症スペクトラム児と親の支援に関する調査研究—親のアンケート調査から—」立命館人間科学研究, 19, 29-41.

### シンポジウム

- 荒木穂積（2007）「集団遊びに着目した学童期プログラム開発の試み」シンポジウム「高機能自閉症およびアスペルガー症候群児の学童期の発達特徴と教育的支援」立命館大学（主催：人間科学研究所, 後援：京都府教育委員会、京都市教育委員会）.
- 荒木穂積（2009）「学童期の特別なニーズと学校外のプログラム—あひるくらの活動から—」シンポジウム「高機能自閉症・アスペルガー症候群の学童期・思春期の発達特徴と教育的支援—学童期・思春期における二次障害への早期対応と人格発達への発達支援—」立命館大学（主催：人間科学研究所）.

## 中期の学会発表

- 下向由紀子・猪島彩・高森美紗・三宅裕子・藤田陽子・中原咲子・坂口扶仁子・張鋭・井上洋平・竹内謙彰・荒木穂積（2008）「自閉症スペクトラム児の特別なニーズと発達課題（1）—就学前後を対象とした分析—」日本発達心理学会第19回大会.
- 小野陵太・西村菜生・弦間亮・飯田真理子・溝部恵・今泉祥子・前田明日香・竹内謙彰・荒木穂積（2008）「自閉症スペクトラム児の特別なニーズと発達課題（2）—学童低学年を対象とした分析—」日本発達心理学会第19回大会.
- 松村紀子・植松か慧・早川未紗・荒木美知子・梅山佐和・荒井庸子・竹内謙彰・荒木穂積（2008）「自閉症スペクトラム児の特別なニーズと発達課題（3）—学童高学年を対象とした分析—」日本発達心理学会第19回大会.
- 佐々木幸子・三井若奈・松井由香里・安田祥子・松本梨沙・春日彩花・富井奈菜実・荒木庸子・中原咲子・竹内謙彰・荒木穂積（2013）「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発（1）—幼児期・小学校低学年：見立てとごっこ—」日本発達心理学会第24回大会.
- 高尾美妃・仲野沙也加・荒木久理子・大林奈央・河邊光・山口真名美・劉爽朗・前田明日香・荒木美知子・坂口扶仁子・竹内謙彰・荒木穂積（2013）「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発（2）—小学校中・高学年：ごっこと協力—」日本発達心理学会第24回大会.
- 井篠和之・松山洋輔・張敏芝・董石・鏡原崇史・山路美波・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰（2013）「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発（3）—中学生期：協働と自主性—」日本発達心理学会第24回大会.

## 中期の年次総会発表

- 竹内謙彰（2013）「ポスターセッション『各研究チームからの研究成果報告：発達支援チーム』」立命館大学人間科学研究所 2012 年度年次総会「自立支援のための持続的対人援助—地域資源としての大学の活用—」

### (3) 2013 年度～現在（2015 年 12 月時点）：後期

後期では、グループ編成の変更をおこない 2014 年 4 月から、参加児グループが 1 つ増える。これにより、参加児グループが 4 グループになり、合計 5 グループの活動となる。中期に引き続き、前期のプログラム構成を基礎に療育活動をおこない、そのなかで、プログラムの内容やスタッフの役割などを検討してきた。

春日らが幼児期後期・学童期前期の療育プログラムの流れと内容について検討してまとめた事例研究が 2015 年 2 月に発行された「立命館人間科学研究 No.31」で掲載されており、さらに荒木らが学童期後期の療育プログラムにおけるスタッフの役割について検討してまとめた事例研究が 2015 年 8 月に発行された「立命館人間科学研究 No.32」に掲載されている。また、鏡原らが青年期前期の療育プログラムにおけるルールづくり活動についてまとめた実践報告が同じく「立命館人間科学研究 No.2」に掲載されている。

学会発表では、後期から毎年ポスター発表を年に 1 回はおこなっている。2013 年 11 月に京都府の立命館大学で開催された対人援助学会第 5 回年次大会で、春日ら、河邊ら、山路らが各グループの活動における工夫点などをまとめてポスター発表をおこなっている。2014 年 3 月には京都府の京都大学で開催された日本発達心理学会第 25 回大会において、藤戸ら、荒木ら、鏡原らが療育プログラムにおける遊びや集団活動について検討して、ポスター発表をおこなっている。

2014 年 8 月には、京都府の立命館大学で開催された日本自閉症スペクトラム学会第 13 回研究大会において、小島ら、藤原ら、上田らが療育プログラム開発について検討をおこない、まとめたものをポスター発表で報告している。

2015 年 8 月に北海道の札幌学院大学で開催された日本自閉症スペクトラム学会第 14 回研究大会において、村上ら、三野ら、西川らが前年度に引き続き、療育プログラムの内容について検討をおこない、まとめたものをポスター発表で報告している。

2014 年 1 月に開催された人間科学研究所 2013 年度年次総会では、荒木、竹内が療育プログラム開発プロジェクトの 10 年間の取り組みをまとめてポスター発表をおこなっている。2015 年 11 月に開催された人間科学研究所 2015

年度年次総会では、荒木らが現在の療育プログラムについてまとめてポスター発表をおこなっている。

#### 後期の研究論文

- 春日彩花・藤戸麻美・安田祥子・松本梨沙・小島拓・古田絵理・富井奈菜実・中原咲子・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積（2015）「幼児期後期・学童期前期における自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発—集団でおこなう見立て活動とごっこ遊びを取り入れたプログラム—」立命館人間科学研究, 31, 35-52.
- 荒木久理子・重富紗希・藤原さつき・中川万幾子・野村朋・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積（2015）「学童期後期における自閉症スペクトラム児に対する療育プログラム開発—スタッフの役割の検討—」立命館人間科学研究, 32, 69-84.

#### 後期の実践報告

- 鏡原崇史・山路美波・小林里帆・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰（2015）「青年期前期における自閉症スペクトラム児に対する療育プログラム開発—自主性と協同性をはぐくむ活動の工夫—」立命館人間科学研究, 32, 131-142.

#### 後期の学会発表

- 春日彩花・藤戸麻美・松本梨沙・安田祥子・小島拓・富井奈菜実・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積（2013）「自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における発達の視点と工夫（1）—幼児期～小学校中学年期：固定化プログラムの柔軟化—」対人援助学会第5回年次大会
- 河邊光・荒木久理子・山口真名美・重富紗希・中川万幾子・藤原さつき・劉爽朗・野村朋・荒木美知子・荒木穂積（2013）「自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における発達の視点と工夫（2）—小学校高学年：「負けられない」子どもが勝敗の決まる遊びを楽しむために—」対人援助学会第5回年次大会
- 山路美波・鏡原崇史・小林里帆・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰（2013）「自

閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における発達の視点と工夫 (3) —中学・高校生期：参加児自身によるルールづくり—」対人援助学会第5回年次大会.

- 藤戸麻美・春日彩花・松本梨沙・安田祥子・古田絵里・富井奈菜実・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積 (2014)「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発 (4) —幼児期～小学校中学年期：集団でおこなう見立てとごっこ遊び—」日本発達心理学会第25回大会.
- 荒木久理子・河邊光・山口真名美・重富紗希・中川万幾子・藤原さつき・野村朋・荒木美知子・竹内謙彰・荒木穂積・松島明日香 (2014)「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発 (5) —小学校高学年期：集団を意識した「なりきる遊び」—」日本発達心理学会第25回大会.
- 鏡原崇史・山路美波・小林里帆・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰 (2014)「自閉症スペクトラム児の遊びと集団活動を援助する療育プログラム開発 (6) —中学・高校生期：集団を意識したルール作り—」日本発達心理学会第25回大会.
- 小島拓・古田絵理・富井奈菜実・荒木穂積・竹内謙彰 (2014)「自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発 (1) —幼児～小学中学年：参加児の発達段階の変化を考慮した遊びの工夫—」日本自閉症スペクトラム学会第13回研究大会.
- 藤原さつき・重富紗希・中川万幾子・劉爽朗・横田聖子・荒木穂積・竹内謙彰 (2014)「自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発 (2) —小学中学年～中学生：集団を意識した活動への参加を促すための試み—」日本自閉症スペクトラム学会第13回研究大会.
- 上田恵理子・小林里帆・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰 (2014)「自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発 (3) —中学生～高校生期：仲間意識を高める活動—」日本自閉症スペクトラム学会第13回研究大会.
- 村上歩未・遠藤祐希・松元佑・富井奈菜実・荒木穂積・竹内謙彰 (2015)「自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発 (4)

—小学校低学年～小学校高学年：ニーズに合わせた個と集団の遊びの工夫—」日本自閉症スペクトラム学会第14回研究大会.

- 三野範子・横田聖子・松元佑・野村朋・荒木美知子・荒木穂積・竹内謙彰 (2015)「自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発 (5) —小学校中学年～中学生：相互関係を高める活動—」日本自閉症スペクトラム学会第14回研究大会.
- 西川大輔・河合誠也・小林里帆・上田恵理子・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰 (2015)「自閉症スペクトラム児の多様性と主体性を尊重した療育プログラム開発 (6) —中学生～高校生期：映画製作から見出した新たな可能性—」日本自閉症スペクトラム学会第14回研究大会.

#### 年次総会発表

- 荒木穂積・竹内謙彰 (2014)「自閉症スペクトラム児・者の伴走的支援—10年間の治療教育プログラム開発の試み—」立命館大学人間科学研究所 2013年度年次総会「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業公開研究会」
- 荒木穂積・竹内謙彰・西川大輔・三野範子・村上歩未・横田聖子・松元佑・富井奈菜実 (2015)「自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発の実践—遊び活動を通して個と集団の発達を支援する—」立命館大学人間科学研究所 2015年度年次総会「対人支援における大学と社会実践の連携—これまでとこれから—」

#### まとめ

これまで、準備期から後期にかけて療育プログラム開発プロジェクトが実践とともに取り組んできた研究についてまとめ、紹介してきた。全ての時期の学会発表を合わせると21回であり、研究論文と実践報告は合わせて8本、刊行物は3冊になる。その他にもシンポジウムは3回、年次総会も3回参加してこのプロジェクトについて報告をしている。

このように、約12年間で療育プログラム開発について、多くの発表と報告をおこなってきたといえる。現在では、幼児から高校生まで、各時期の療育プログラムの開発に携わっている。このように続けられてきたのは、参加児の年

齢、学年が上がることで新たに出てくるプログラムの問題点・課題について、検討を続けて療育プログラムをより良いものにしてきたからである。また、検討してきたものをまとめるために学会または論文などで報告をしてきた。今後、研究活動として学会または論文などで報告していくことで、療育プログラム活動をまとめていき、未来に向けて残していくことが大切であると考えられる。

(文責：松元佑)